

わかば

2019. 2. 9
第18-39号
文責 校長 信國 寿敏

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

重点目標 一人一人が輝く教育 ～期待登校・満足下校～

避難訓練(年3回)・・・ロックダウン避難訓練(5月、2月)、火災避難訓練(10月)

2月2日(土)は、本年度2回目のロックダウン避難訓練を実施しました。いつ何時に不審者、侵入者が来るかもしれないのがアメリカの現実であると認識し、いざと言う時に、的確な避難行動ができるようにすることが目的です。

あわせて、「備えあれば憂いなし」の考えの下に、職員の対応や備品、用具、連絡等の修練を図ることも大事な目的です。今回、右の写真のように、侵入者から教室内部がのぞきこまれないよう、安全対策の改善を図りました。



日本人学校に赤鬼、青鬼がやってきた・・・豆まき! 「これはたまらん。退散じゃ!!!」

2月2日、節分の豆まきでは、園児たちは赤鬼、青鬼めがけて豆を容赦なく投げていました。

鬼たちはうなりながら園児たちに迫りますが、園児たちの気迫と勢いにたまらず、どこかに退散して行きました。

豆づくり等にご協力をいただきました保護者や学校関係の皆様へ、心より感謝申し上げます。

下校時、「校長先生、鬼だったでしょう?」と、尋ねられましたが、さて、鬼はいったい誰だったのでしょうか。



校長授業参観・・・幼稚部の五領域の授業 I

【幼稚部 切り紙制作 中川先生、吉田先生】

幼児教育のねらいと内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」そして、「表現」の五領域です。幼稚部では、計画的な年間の制作活動を通して、園児たちの五領域の学びを深めてきています。

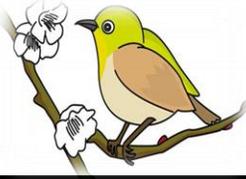
今回の授業では、切り紙制作の活動を通して、制作する楽しさを味わったり、園児間の人間関係づくりを体験したりしていました。

また、作品を鑑賞する場面では、表現したり話したりする言葉の領域もちゃんと仕組んでありました。

人形劇を取り入れた導入の工夫など、意図的、計画的な中川先生の指導や細やかにサポートする吉田先生のよさを感じることができました。



児童生徒の作品紹介 32



今回は、小学部2年の「冬がいっぱい」、学芸会の作文と、小学部6年の読書感想文と作文を紹介します。

校長 信國 寿敏



冬がいっぱい

12月 6日

雪山を 見ると、スノボの
思いで、ぐでして冬になった
と思います。クリスマス
のライトを見るときは、
と、思います。クリスマス
プレゼントをだれかがもら
ったり、冬だと思えます。

（なまこ）メイデンカイリー

2年 メイデン カイリー

冬がいっぱい

12月 17日

家の前では、はが、
がさがさが、か、か、
立木をたてるのを見
ました。木は、はが、
一まいもた、ハの、
木は、さむそうだと、
いきました。

（なまこ）山王大輔

2年 山王 大輔

冬がいっぱい

12月 6日

木
わたしは、はが、おちた木を
見ると、冬を、かんじます。
「いやだ、はが、かんば、はが、
か、い、い」と言っているみたいです。
けど、はが、かんばの、木に、
ひかるクリスマスライトを、木に、
つけたら、きれいになります。見
たのも、たのしくなります。

（なまこ）ワイルダー小春

2年 ワイルダー 小春

冬がいっぱい

12月 7日

アメリカの学校に
いくとき、土がしろくな
て、おたしは、それを見
て、ゆぎにみえました。
パパにきいたら、しもで
した。ゆぎだ、たら、よ、
たのにな、とおもいました。

（なまこ）はがこ心柁

2年 芳賀 心柁

【六年生 読書感想文】
「冒険者たちガンバと15ひきの仲間」を
読んで

六年 平井 寛士

ぼくがこの本を読んだきっかけは、ぼくが読む本を探している時、母がこの本を読んだらと、提案してくれたからです。

この本は、ドブネズミのガンバが14ひきの仲間達と共に、イタチのノロイにうばわれた島ネズミの忠太の島をイタチから取り返すという物語です。

ぼくは、ガンバには、とても勇気があると思いました。イタチがこわくても、仲間のためにあきらめずに、イタチに立ち向かったという所です。ぼくだったら、仲間を見捨てて逃げてしまうと思います。

ぼくが、一番悲しいと思った場面は、ガンバの大切な人、潮路(しおじ)がイタチのノロイによって殺された所です。ガンバは、すごく落ち込んでいたと思います。ぼくも大切な人や、家族が死んだら悲しくなります。ぼくも、おじいちゃんが死んだ時は、死んだことが信じられなくて、とても悲しかったからです。

この本はぼくみたいに、ファンタジーが好きな人はスラスラと読んでしまうぐらい面白い本です。おすすめしたい一冊です。



自由に空想の世界を楽しめる本を紹介してくれたお母さんは、さすがにわが子が求める本はどれであるか、よく把握してありますね。「お母さん」でなく「母が」と書いているところは、高学年らしくて素晴らしいです。私は、小学校時代に見たトラが主人公のマンガ映画で、母トラが死ぬ場面で涙したことを今も覚えています。本も映画もその世界に入ると、ずしりと心に響くものがありますね。

【六年生 作文】
「知らない自分」

渡辺 実伸

「知らない自分」の言葉は、ぼくにとってやる気を失った時に必ず頭に浮かぶ言葉だ。

去年の野球の試合だった。やる気を失ったぼくに、父がささやいてくれた時から、ぼくの忘れられない言葉になった。

野球のチームに入ったぼくは、去年より上のレベルにいて、年上の子たちと上手くなっていくように思い誰よりも気合を入れてやるつもりだったのだが、チームメイトは、ぼくよりも上手く試合ではあまりいいポジションにつけなかった。そのせいでぼくのやる気は、減っていき練習でも全力を出せなくなってしまった。

一つの言葉がぼくを変えた。試合は二対五で負けていた。試合は、そのまま続いて四対五まで追い上げぼくたちは延長戦になるのを目指していた。延長戦にするには、同点に必要があった。ぼくは、コーチに呼ばれバッタボックスに向かった。するとアシスタントコーチを務める父がぼくを呼び止めて、

「知らない自分を見つけれ」
と、ぼくにささやいた。その言葉を耳にするとぼくは、蘇るようにやる気が出てきた。

「知らない自分」の意味は、残りの自分と言う意味で、全力を出し切ってほしいと言う父からの合図だった。

ぼくはこの言葉を選んだ理由は、その日にホームランを打ったからだ。

今でもやる気がなくなった時には、その言葉を出す。



父親として、またアシスタントコーチとして、日ごろから息子さんの苦悩も見ておられたのでしょ。まさに今ここで息子に告げねば思いが、この言葉になったように感じます。その言葉の意味するところをしっかりと受け止め、これ以上もない良い結果を導き出した潜在能力に感心します。

日本とアメリカの少年野球の考え方、取り組み方などは違うかもしれませんが、やはり一つの目標に向かって、共に力を出し合い、勝利をつかみとろうとすることは同じかと思います。これからも頑張ってください。





【まもなく、作品紹介を終了します】本年度のわかばでは、これまで多くの児童生徒の作品などを紹介してきましたが、お楽しみいただけただしょうか。たくさんの豊かな感性に出会うことができ、ついつい掲載にも熱が入り、枚数が多くなることも度々でした。

2月中を目安に作品紹介のコーナーは終了し、3月は卒園、卒業関連の掲載にしていけますので、よろしく願います。2019年度のわかばで、再び児童生徒の作品を紹介します。

今回も、第39回海外子女文芸コンクールの「作文の部」から1点、ご紹介します。

※海外子女教育11 No549から切り貼りしてpdf転写



スラムの子ども達のために

じゅんじゅん

ムンバイ日本人学校（インド）

小五 草場 美海

私が立っている黒々とした地面の横にあるふたのない側溝には、赤や青や黄色のマール色をした油が流れています。そして、そこから中に散らかっているゴミからでしょうか。今までにかいたことのないにおいがします。

私は、去年の冬休みに、スラムツアーに参加しました。私が行ったスラムは、世界で三番目に大きいと言われるインドのムンバイにあるダラビーというところです。二・一平方キロメートルというせまい場所に、約七十万人もの人々が住んでいます。四角い箱のような家が、めいろうのようにずっと続いています。その家と家の間は、六十センチメートルぐらいで、一人一人通るのがやっとです。家の中はとてつもなく古く、二階へ続く階段は急で、とてもきんぐです。水は、決められた時間にしか出ないので、ドラムかんにためられています。私が想像した以上のずっと大変な暮らしぶりでした。

スラムツアーに行く前は、スラムの人達は仕事がなく、しゅう入がないと思っていました。しかし、実際には、毎日働いて給料をもらっています。スラムの人達の仕事は、主にごみの中からプラスチックを探してリサイクルすることだそうです。ほかにも、パンを作る仕事やカバンを作る仕事、服を作る仕事があるそうです。服やカバンを作る場所では、機械の強いオイルのにおいがして、とても体に悪そうでした。そんなじょうきょうで一日中働いても、もらえる給料は日本円で九百円ぐらいだそうです。

しかし、げん関先ですわっていたスラムの子ども達はうれしそうに笑顔で私達にあいさつをしてくれました。私は、なぜだろうと、思いました。私だったら、自分達がどんな生活をしているのか見に行かれたら、いやだからです。すると、ツアーのてん乗員さんが説明してくれました。

「スラムツアーの売り上げの八割は、スラムの子ども達の教育のために使われているのです。」

それを分かっているから子ども達は、私達を笑顔で受け入れているのかもしれないと思いましたが、勉強できることを楽しみにしているのかもしれないと思いました。今度は自分が、教育を受けられる番かとわくわくしているのかもしれないと思いました。私にも、スラムの子ども達のために何かできることはないのかと頭のどこかで考えるようになりました。

今年の三月に、学校で、バザーがありました。バザーの一週間前ぐらいに、お母さんが、「バザーで、美海の手作りのカードを売ってスラムの子ども達にき付けたいんじゃないか」とい。

とアドバイスしてくれました。しかし、そのバザーのお金は、本当は、学校のクラブの活動費になるものでした。なので、校長先生に、「スラムの子ども達のために、売りたいものがあるのです。お店を出してもいいですか。」と聞いてみました。すると、

「いいですよ。」と許可してくれました。友達も手伝ってくれることになり、二人でカードを売りました。私の弟も、友達と一しょに、家にあつた使わなものを売ってくれました。そのお金は全部で約千九百円になりました。日本円で約三千二百円です。そして、ムンバイ日本人寺妙法寺にき付けました。ムンバイ日本人寺妙法寺は、スラム

ムの子どもの達のために、ようち園を開いているお寺です。そこには、インドに四十年間も住んでいる日本人の住職さんがいて、スラムの子ども達のために活動されています。住職さんは、「ありがとうございます。子ども達のために大切に使用させていただきます。」とていねいに言ってくれました。

「よろこんでくれるかな。」笑顔で、私達をむかえてくれた子ども達のお笑顔を目にうかびました。

スラムツアーに参加して、自分にとって当たり前であることが当たり前ではないということに改めて感じました。そして、教育の大切さや有がたさを知りました。勉強をすることが大切なのは、分かっていたつもりです。しかし、実際には、言葉だけで、その意味や理由は分かっています。でん乗員さんが、ツアーの中で、自分のことを話してくれたことがあります。それは、自分もスラム出身であること。自分は教育を受けられたので、今日こうして仕事をできていること。スラムの子どもの中には、まだ勉強ができず、働いている子どももいること。

私は、教育が受けられない子ども達は今もいることを少しでも多くの人に知ってもらいたいと思います。そして、いつの日か世界中の子ども達全員が笑顔で、勉強できることを心から願っています。私も、一日一日しっかりと勉強していきます。有がたさを忘れずに。

